

昭和三十六年七月二十五日第三種郵便物認可
（毎月一回・十五日発行）

（通第一五一号）

慈光

第十三卷 第十号

教行信証『信卷』講話（六）……………近角常観（1）

他山の石……………池山栄吉（8）

善財童子の求道……………福島政雄（13）

三宝に帰依しまつる……………柳原徳草（17）

心と真実……………佐藤強三郎（22）

教行信証『信卷』講話 (六)

近角常觀

四 一念即專心等

さてここでお言葉の調子が変わつて来て、次には

『然れば願成就の一念は、即是れ專心なり』

願成就文の乃至一念は、之を時刻の上より言うると、既に五席で頂いた如く、信樂開發の時刻の極促を現わす一念であるけれども、これは時刻にばかりに限るのではない。

又この一念は、広大のおまことを頂いて、満心お慈悲ばかりとして貰うた味である。これは既に六席の処の御文にも

「一念と言うは、信心二心無き故に一念と曰う。又是れを一心と名く」

と仰せられてあつて、一念は即ち専らお慈悲ばかり、仏ばかりとして貰うた処である。故に「一念は即ち專心なり」であります。次に

『專心は即ち是れ深心なり』

は、その仏ばかり、お慈悲ばかりという味は、軽い「ばかり」の味ではない。深く／＼仏の眞実を頂いて『歎異

次に

『深心は即ち是れ深信なり』

こは拠所というとむつかしくなるけれども、善導大師の深心中の御文に

深心と言うは、即ち是れ深信の心なり。

というお言葉があつて、これから仰せられたお示しである。即ち深く信ずる所の心であるのである。

処でその深く信ずるといふはどうかというに、ここにすこしくおはなしなくてはならぬ。

五 仏の眞実と私の不実

そも／＼私共は凡夫の浅い心として、どんなことがあつても他が信ぜらるるなどというのではないのであります。たとえば友人を如何なることあつても疑わぬと措こうと覚悟して居ても、その中「一念若しや欺されて居はせぬか」という心が起つてくると、もうどうして見ても信じられぬようになつてくる。こは私共が日常つねに繰り返して居る問題であります。で人間は自分の心を立場としては、どんなことがあつても他を信ずるなどということは出来ぬ。

処が反対に、友人の方が飽くまで自分によくしてくれらる。自分の方は飽くまで不実薄情で向つて居るに係わらず友人の方は飽くまで私の不実を承知の上で、益々親切にし

抄』の二章で言えば、

そのゆえは、自余の行をばげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされまいらせてという後悔もそうらわめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし斯く明かに、我が身の悪しさが分つた上での仏ばかりの味である。即ち「何れの行も及ばぬ者故、見捨てられぬ、しよりのない者ゆえ救う」とある広大の御まことであれば、此のまことが聞えて見れば、如何にも自分は外に道の有りようはなかつたのである。成る程、

「我が身ば現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなし」

かくいよ／＼地獄以外に行き場のなき自分であることがいよ／＼明かに分つて、成る程かくの如き自分に対しお見捨て無き仰せの有難やと、その者がこの御親切一つに腹ふくらせて貰うた仏ばかりの味である。故に専心は是れ深心なのであります。

て呉れる、となつてくると、茲に初めて如何な不実の私も其の友人の変らぬ眞実のために降参して、「あゝよくもよくもこんな自分にそんなにまで善くして呉れる」と、先方の親切が受けられるとなつて来るのである。

で、こは常に云う、私の不実と先方の眞実との力較べである。そして向うの眞実が、終に私の不実に勝ちおおせるか、私の不実が何時までも先方の眞実を弾ね反してしまふかの問題なのであります。

で、昨夜も皆様にこの事を話すと、皆様は「イヤ自分の不実と仏の眞実と相撲とつて居るとは思わぬ」と仰言るけれども、私共の平生はこの仏の眞実と私の不実との相撲なのである。そして切角の仏の御眞実を、端から弾ね反して居る様なのであります。

然るに片方の親切なる御方の方は、私が斯く不実で双向うに係わらず、益々親切を以て向つて下さる。それをこちらには益々疑いの根性を以て反抗して行くのである。

ここで人間の親切であると、如何な実意の人でも一度ならず二度ならず、弾ね反されて見ると、最早や二の矢が継がれなくなる。処が今この親切なるお方の方は、そういう人の親切を飽くまで無にしてかゝる、その性分が益々可哀相で捨て置けぬとの、飽くまで広大の御眞実であるために益々同情の涙をもつて向うて下さるとなる。

処がこちらはなお、不実の心を以てそれに反抗するけれども、片方が飽くまでこちらの不実の上越す広大の真実であるために、終に此方が如何にも不思議の御親切であることに気がついて「成る程、今まで一応の親切かなんぞのよう思うて居つたが、そうまで思召して下さる広大の御真実であつたのであるか、実に恐れ入りました。長々御親切にさからつてばかり居て、実に何とも申訳ない」と、初めてこちらが頭が下がるのは、即ち向う様の御真実の爲にとうとうこちらの不実が打ち負けて、それ程までの御真実に對し、此方の長の不実が申訳ないとなるからである。

で、信仰には、この此方の不実と、仏の真実と相撲取り、此方が恐れ入つて謝り果てた思いがなくてはならぬのであります。

処が斯く言うても「それは仏じやもの、そうある筈だ」ととられては、これまた何にもならぬのである。それは頗るお慈悲を敬うた言葉に似て、その実、仏をひと呑みにして仕舞うて居るのである。これでは甚だ申訳ないのであります。そこでこの間の味いは、皆様が、友人間の事柄にして考えられると直ぐ分る。

処が昨夜も思うたのであります。皆様にこのこの処を私が力を入れてお話しして居ると、皆様もよく御了解下されたように見える。だからお分り下されたものと思つて居ると

つてしまわれるか知らぬけれども、向うの出よう次第で狂つて来る親切なら本当の親切でないのである。

或はそれにしても「自分の方が先じやない、此方はする気で居るのだけれども向うが不実で来るから出来ぬのだ」とこう仰言るか知らぬけれども、そう云う親切なら、それは自分さえすれば、先方は受けて呉れると、初めかち予期している親切である。或は、もう一つ言うと、此方からさえすれば、向うは屹度受けてくれると、恰も金で物を買う気でやつて居る親切である。これではとても親切ということとは出来ぬのであります。

処でこれが理窟のようで決して理窟でない。故にこの慈悲を頂くには、自分の方に一分でも善いことが出来るといふ気があつては、とてもお慈悲の程は頂けぬのである。

私はよく、人の信仰をいかぬということを言う。甚だしきに至りては、十年廿年、聴いて居られる人の信仰を否定する。これがみんな、自分の持ち物がいかぬとならなければ、本当のお慈悲の方が頂けぬからであります。

甚だ皮肉なことを申すようであるけれども、随分皆様の中には「自分の信仰はまだ本物で無い。けれども多年聞いたのであるから、少くも八分通りはよいであろう。何処か物足らぬ処はあるけれども、それはあと一二分の処だ」とこう思うて居る方が、すくなくなろうと思つて居る

実は筋丈の御了解に終つて居る方が多いのである。筋は何程分つても、真に斯く御見捨てなく仰言つて下さるお慈悲が分つたのでなければ何にもならぬのであります。

六 私 の 経 験

そこで、どういふやなれども、私の経験を言いますと、私は初めは人に飽くまで親切が出来た。立派によくやり通すことが出来ると思つて居つたのである。

でそれで遣つとる中に、此方が何程善くして行つても、先方が自分の心事をよく理解してくれぬという事柄が持ち上つて来たのである。私はこれに行き当つたのである。

「自分はこれ程よくして居るに、先方は却つて悪意にとり、受けてくれぬ」

となつて来ると、恥しながらその人を悪しく思い、不足に思ふ心が起つてくる。

するとその心の爲に、今迄私の善くして居たと思ふ親切が最早や続けれなくなつて、何程力んでももういかぬようになつてしまつたのである。

ここは御同よう、人に親切なんぞ到底出来ぬと言いつても、頗る気のつき難い処なのであります。皆様は「自分は親切にして居るのだけれども、それを向うが受けてくれぬから続けられない」と、これを向うの精にして何気なく通

である。

先夜も武田さんは、御自分のお喜びになつた処を話されて、「最後に、も一つ感激さえあれば充分だと長々思うたが、その感激が如何にしても得ることが出来なかつた。処が何ぞ知らん、その最後の感激一つが如何にしても得られぬものであることを哀れみて、お見捨てのない御親切であると聞かされて、広大の御心を知らして貰うことが出来た。」と仰言つた。

すれば百中、唯一つでも「も少し不充分」と思ふ人があつたらもうその信仰は駄目なのである。九十九まではよくつても、あとの一つが怪しかつたらもう可かぬ。これは九十九までが親鸞聖人の直筆に違わぬと思つても、あとの一分が「併しどうか」と思われたら、もうその書き物は取り所が無い。「あとの一分でまがい、の無い真筆になるがな」と、いう如き真筆のあることは無いのである。若し一分でも疑わしい点があつたら、あと九十九分が全部偽物となつてしまふのであります。

又前年、或方は「自分は或人を深く信じて居るとして、九十九までその人を堅く信じて居る。けれども最後に『併しどうか』という思いが起つて来ると、もうその念が消されぬので困る」ということを仰言つた。私は「それでは御自身は九十九まで堅く信じて居る積りで居られても、

あとの一部が駄目になるのではないか」ということを申し上げた。「あの男はあんなに言つて居るけれども、若しや自分を欺いて居るのでないかという念が、最後に唯一つ出て来ると、それまでの九十九信じたというのが一辺に引くりかえつて皆嘘言になつて来る。それは初めの九十九信じたというのが、向うの真実が分つて信じたのではなくて、自分の自力で信じようとして信じたのであるからである。即ちこれで見ても人間は到底他を信するなどという事が出来る者でない事が分る」ということを申し上げた事があります。

すると其の方の仰言るには「成る程自分は随分堅く人を信ずることが出来る積りで居たけれども、一分不足が出てくると、始めの九十九信じたと思つて居るのがみな嘘言になつてくる。成る程これだから人間は駄目なのだ。世の中は虚仮なのである。だから君の言われる信仰は、ここで、もう間違わぬのはお慈悲ばかりと、斯く信ずるのか」と、こう仰言つた。

この最後のお慈悲ばかりは間違わぬというのも、矢張り自分の心で然う思うのであるから、是また駄目である。すゝるともはや自分の方には頼むべきものが何等なくなつてくる。無いから即ち、親の御心配が有難いのである。みんなが物を持つて居るから、折角の親の御心が頂かれぬのであります。

悪いのである。お助けを持つて来られるから、何だか悪いなりで極楽に参らして貰うことのようになつて来る。然うではない。

仏のお慈悲は「その悪いのが可哀相で見居られぬのである」私が疑えば疑う程、「その疑の性分が哀れで益々すておけぬ」と、ここで私のその悪しき、不実のために、飽くまで遣る瀬なく仰言つて下さる御真実である。

即ちかく飽くまで仰言つて下さる御親切であるために、終に一点のまことなき私、……炭の塊の私であるけれども、向うが斯く飽くまで燃やさない置かぬとの火のお心で向うて下さる御真実であるために

「あゝよくも、かほどまでの炭の私を、お見捨てのない仰せの有難や」と

と、ここで初めて頂かして貰われるとなる。故に仏の仰せはここ、私がまことならざればならざるだけ、弥々哀れ、とある。ここのとこを皆さん能く御了解願えたてありましようか。

故にまだ自分に一分でも真実が存すると思つて居る間は、このお慈悲は頂かれたのではないのである。去りながら、これは決して、自分にまこと無い者と思いなさいと申すのではないのである。けれどもこの親の御まことが頂けると、何人も自分のまことなかつたことが分つて来るとのこと

さてすると最後に、何処で頂くのかというに、そういう嘘偽りばかりの私である。すること、思うこと一つとして虚偽ならざるはなかつたのである。で、ここで「成る程して見ようなき自分であつた」と、ややもすれば、これに腰掛けてしまふ人がある故、ここを一言しておく必要がある。「成る程、今まで自分は嘘、偽りばかりであつた」とここでこれ丈のことが分つたのが、信仰では無いのである。それは唯今まで知らないで居た、自分の悪しきに漸く気がついて来たというまでの事に過ぎぬのである。

故にここで本當にこれに気がついて来た人であると、最早こんな処に落ちついて腰掛けては居られぬ。今まで思つて居つた信仰お慈悲も、乃至親切も友人も、皆嘘であつたとなつて見ると、もうしようがない。どうか早く本當の処を聴かして欲しい」と、何人にあつても最早こればかりになつて来る。

処で、今かく一点の取り所もなくなつた私のために、疾くより私の不真実を哀れみ、そのために飽くまで見捨てざる思いをもて、待ち受けて下されたが仏の御真実なのであります。

一体、ここで皆様が、直ぐお助けを持つて来られるのをしたのである。大分むつかしくなつたが、以上は昨夜、夜更けまでこの処をお話したために持出して申したのであります。

そこで今云う如く、飯令九分まで真筆であつても、あと一分が怪しかつたら応挙の絵でも捨てなくてはならぬ。が斯く一分一厘真実がないとなり果てた者を、これを見捨てぬとある思いがけない御真実を頂くと、もうこれに嘘もまこともあることないのである。これを聞かされると「斯く一分一厘まことの無い者を、斯程までの遣る瀬の無い思召か有難や」と、何人にあつても、餘りに「お慈悲の忝さに頭が下りて有難い。そこでこれがお助けなのである。

それを皆様は「悪いけれどもお助け」と、その間にまだ物を残して置いて、悪いなりにお助けに持つて行こうとせらるるから間違ひになるのである。

然うでなくて、今いふ如く、その悪いが哀れ、捨てぬ、との、飽くまで「お見限りのない御親切であるために、とうど此方の悪いが敗けて「それ程にまで広大の真実で言つて下さつたのであるか」と、その火のお心が頂けた一念に、炭団が残らず火となるのである。その一念にその広大の仏のお心が、私の悪い心底まで燃え移つて下さる為、それが即ち真実の信心となる。

故に深く信ずる深信の心には、一分も、一厘も自分より信ずる分子とは、有ることは無いのであります。どうかというに自分は飽くまでも罪ばかりの者、然るに仏が飽くまでそれを捨てぬとの廣大のお慈悲であるために、終にこちらが負けて信ぜずには居られなくなつた処が、この深信の様である。

この捨てぬの深き御まことは何処から来るか、私の方の一分も一厘もまことなき様が仏より御覽下されて、哀れで見居られぬからである。私の方は一分一厘真実の無い処、この仏の御まことの深きを聞く故、如何にも有難くて信ぜずには居られない。するとかく私が悪いばかりに長々の仏の御真実を頂くと、悪い奴なれどもお見捨てなき思召し一つに腹ふくれて浮ばせて貰えるとなるのであります。

未完

住田智見師遺訓

- 一、安心の道は教のままに信奉するに在り。
 - 一、いま教とは釈迦諸仏の説にて、我が親鸞聖人の伝えたまえる大無量寿経なり。
 - 一、大経には久遠の如来の本願を説きたまえり。
 - 一、如来は不可思議の大悲心により、無限の智慧をかたむけて、我等のたすかる一道を成就せらる。
 - 一、道とは、ただ念仏して如来の御国に往生するなり。
 - 一、こは我等が如来のさとりを聞き、無限の大悲をおこして一切の衆生をたすけんはたらきをうることなり。
 - 一、ここに於いて我等永遠の希望を得て、人生における日夜思念のあまりに浅劣なるを反省進展せしめらるる念仏の幸榮、全や此身に在り。
 - 一、念仏者は無碍の一道也とは、これを云う。
 - 一、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずる外に別の子細なきなり」とある。
- 入信の範なり。

—真宗大系より—

他山の石

四月（昭和四年）に住吉から京都に移つてから、信仰談らしいことをしたのは、十月に是所（京都東山、徳善寺）で話したのが皮切りである。その時はストリークの話をもとめて見た。そして口癖にしていた念仏が、如何に心を開かれて行くかを中心にして話をしたために、その頃胸から湧き出ている思いを存分に話すことが出来なかつた。

その後、名古屋の信道会館、奈良の浄教寺、京都の高倉会館で、心からの感懐を云いたかつたが、それもどうしても十分に話せなかつた。子供が積木細工で遊ぶように、材料はあるが、それをうまく積み建てるのが出来なかつたのである。

さて、信仰の家の材料は、印度の産で、それが支那に入つて加工され、更に日本に来て大発展をした。ところが今日私が新しく試みたいのは、独乙産の材料を加工して信仰の家を建てて見たい。それは独逸の詩人ゲーテの二十代から八十頃までずつと続けて書いて、遂に書き上げて死んだ有名なファストの話なのである。

で、「他山の石」と話の題をつける。寶石を磨くには、

池山榮吉

他山の石で磨けばよい。それと同様に、真宗の意味を味わうのに、他山の石として、独逸の石で磨いて見たいのである。

私がかつて、独逸の哲人、ニイチエのツアラツストラを他山の石としたが、ゲーテのファストの如きも、よい他山の石である。しかしむつかしいから、易く話すことが困難であるが、とに角、試みて見よう。

先ずファストを読んで行くと、神様と悪魔と人間の関係から話が始まつている。

天上の序幕が、微妙な音楽と、美しい華に飾られた天界かりひらかれる。そして王様が輿殿から出て、天使の群のところへ歩みをはこぶ。

すると天使の長老たちが、神徳を賞め讃える。そこへ悪魔のメフェストがあらわれる。そして王様に話しかける。

メ「旦那、毎度ご最負にあずかつて有難う御座います。

私は天使の長老のように、月や星の世界はわからないがただ人間は、天地が拓けてからこのかた、何時まで経つ

でも、何呆なことばかりを繰り返してはいますね」

神「相変わらずお前は悪口が達者だ。然しお前はファストを知っているかい。彼は余程変つてゐる。天からは星を喰ひ、地からは飽くなき享樂を得んとしてゐる。然し何時かは彼の本心に帰るであろうが、人間は努めてゐる間は迷うものだ。」

メ「ファストですつて。或る程、人間の中じや変りものですなあ。それでも、旦那のお許しさえあれば、あの道学者をすつかり誘惑して丁うことなんか朝食前でサア」

神「人間が生きている間は、悪魔にまかせてゐる。出来るなら存分に試みてみるがよい。然し用心しないと、お前が恥じ入る時があるよ。すべて善良な人間というものは、無力ではあるが、不滅な願い、よくなりたいたいという願ひを持つていて、正しい道を忘れてしまふものでないから」

メ「旦那は太つ腹で仲々話せる。じやあ御免蒙つて、これからファストをだまして勝鬃を挙げましょう」

神「よし。それはお前に委せてゐるのだ。元來人間は倦み勝のものだから、それを刺戟して目を覚ますために、悪魔の存在が必要なのだ。」

「今、ファストという男も迷つてゐる。すべて人は努めてゐる間は迷うに定つてゐる」とは何であろうか。

ファストは火と燃えている。知においても無上究竟、享樂においても究竟的に満たそうとしている。そのために學問を努めて来たが、これだけでは強い欲求に対しては焼石に水である。知的欲求にはそこで錠がおろされる。そして部屋を飛び出してしまふ。

この求めて止まない精神の持主、これがファストの本性であるが、この心のある間は、人間は迷うに定つてゐる。

さてファストは秀れた本能を持つてゐる人であることをあらわしている。だからこの様な強烈な点があるが、これはファストには限らない。我々にも亦、求めてく／＼やまぬ。何をそれでは求めているかといへば、常に満足を求めつつある。いやしくも人である已上は、満足を求めてやまぬ、一挙手一投足そうである。

現に今月のように雨の降るのに皆さんが此処へ集るのも一つの満足を得るためである。雨の中を此処へ来るのもそうであるが、こうして私が話をするのもそうである。我は比較的より大なる満足へと動きつつある。

ところで皆様方は雨の中に此処へ来て、何を得ようとしているのであろうか。それは一人一人、生活に満ち足りな

以上かファスト劇の序曲である。これから悪魔が勝つかファストが勝つか、そこに全曲の展開がある。

ファストは暗黒の促しに対し、目に見えない衝動があつて、一時は物欲的、感官的に負けるかと思われるまでになるが、あやうく其処を逃れ出る。そして寿齡百歳になつて死の間際に

「止まれ、お前は、本当に美しい」

という大満足を見出すのであるが、今しばらく、天上の序曲についての感じを二つ三つ話をしよう。

一体神様と云つた觀念はキリスト教の觀念で、仏教にはこれはない。仏とは悟りをひらいたもの、迷いを払つたもので、我々も仏になり得るのである。

悪魔は、ファストの仕組では神の作つたもので、常に休みたがる人間を刺戟して、覚めさせず道具としてつかつてゐる。

私共真宗の立場からは、神様も、悪魔もひつくるめて、業とする。業によつて今こうしてゐる。「石一つ坂を下るが如く」我々も日々を送つてゐる。石が一つ坂を下る。これは何か知り尽すことは出来ないが、業によつて、今こうやつてゐる。それは動かさない事実である。

次に序曲の始めに、神が悪魔に向つて

いものがあるから、此処へ来たならそれが満たされると思つて此処へ来られたのであろう。

私の子供だつた頃からの歩みをかえりみると、名譽が一番の目標になつて、それを得ることが眞の満足と思つた。ところが最近、岡山の医大の学生に、何を求めているかとたずねた。ところが彼は、一も金、二も金であると答えたので、世の中も變つて来たと思つた。とにかくに、求めてやまぬ者の常として、或時は財産、或時代は地位と、人さまさまの道をあゆむ。そして何が比較的大きな満足を与へるか、この道もある、あの道もあるという風に、種々と選択しては、たゆみなく求めて行く。

さてそうしてゐる間に、眞の満足は外から物を取り容れるのではなく、即ち財産や地位を取り容れるのではなく、内なる心の釣合、組み合わせをよくする、そこに眞の満足があると知れてくる。

我々は煩惱のままに勝手なことをしているが、心を整へることが出来るのであろうか。それが出来れば、それが眞の満足と思う。それまで来ると、始めて人間らしい道に出たのである。一口に言へば、外からあれや、これやと取り容れるのではない。むしろ我が心をよりよく組立てようとする、それが出来れば人間らしくなる。

ここに西に向つて行く旅人の姿が生れる。二河白道はそ

れである。飽くまでもよりよくなりたいたいところへ行
く。それは自分の体験であり、経験であると同時に、古来
の聖者の体験であり、経験である。親鸞聖人もそうであ
る。自分の人格をもつと向上させたい。自分を仏へ近づけ
たい、無上究竟の仏に近づけしめたい、それが聖人の願で
あつた。

ところが、成る程、名譽を得ることは六ヶ敷しい。然し
努力すればそれ相当に得られる。外から物を取り入れるこ
とは成る程六ヶ敷しいが、それも或程度得られもする。
然しそれと、自分がよくなりたいたいということは何れが六
ヶ敷しいか。考えて見れば、これ程六ヶ敷しいことは外に
は殆んどない。真剣に考えて、その方に近づこうとすると
その六ヶ敷しさがいよ／＼知れて驚くばかりである。

先月、高倉会館で「つばさ」と題して、ファストにある
話をした。その要点は、主人公ファストの歎き、よくなり
たいという心の翼はあるが、悲しいかな身の翼がそれにそ
わない。それならそれで、出来ないこととして諦められる
とよいが、それも出来ない。即ちこの私達の、よりよくな
りたいという心は消えないのである。消えないけれど、身
の翼がそれにそわない。実行が出来ないのである。そこを
ゲエテは心憎いまでにファストの上にあらわしている。

が、前へ／＼と飛びあがろうとするのは、誰にも生みつ
けられている。けれども月影は入る山の端もつらかり
き／＼で、如何ともする術もない」

然し消すことの出来ない心の欲求、よりよくなりたいたいの
心こそ法の本である。だから清らかな欲をおこして法を求
めねばならないが、さて我身を省みると濁りきつている。
「俺はただ世の中をかけて来た。よいものがあればたぶ
さを掴み、つまらなくなると手放してしまう。はじめは
大きく力強くやつたが、今は賢く利口になつた。只のぞ
み、それを満し、更にまた望む」

ファストのこの述懐はそのまま私共のそれである。そうし
た渦巻の中に没して、何時までも浮ぶ瀬のない
「いづれの行も及び難き身なれば、とて地獄は一定す
みかぞし」
というばかりである。

この時「ただ念仏して」の「ただ」がひびく。そして親
鸞聖人がわかる、従つてまたよき人の仰せもわかる。
私がわかつたのであるから、ひとにわからないというこ
とはない。自分のわかる限りに於いてひととわかる。
「ただ念仏して」のよきひとのよびかけを「親鸞一人が
ためなりけり」と受け容れる機縁がそこに到来する。

即ち、ファストは、哲学も、法学も医学も、神学もやつ
たが、しかも満足は得られぬ。学ばぬ前とちよつとも変つ
ていない。

そこで魔法使を呼び出し、地の靈を呼び出したが、そう
して見ると又失望する。

「お前はおれとは似ても似つかぬ。神の生き写しではな
い。旅人に踏みにじられる蛆虫に似ている」
と、地の靈からののしられる。これでは絶望よりほかな
い。そこで自分で調合した毒杯を仰ごうとする。

その時、復活祭の鐘か聞えて来て、子供の頃の神様を思
い出して、再び人間に還つた。そして復活祭を見に街に出
ると、街の人々は、ファストを顧みて、非常に賞讃する。
それは慈悲深い医学者として、疫病を救つた恩人として、
深い敬意を表する。だが彼自身を顧みて、それは虚名であ
るとファストはかえつて恥じる。

かくて群集を離れて静かな田舎の景色を眺める、そして
独白する。

「静かなよい天気だ。おれに翼があれば、あの大空を思
うように翔るのに。心の翼に、身の翼がそうことが出来
たなら、思う存分に青空を翔るのに。ありつたけの声で
雲雀が歌う時、峻しい岩山の上空に、鶯が翼をひろげて
飛び行く時、或は野を越えて黒鶴が郷里へ急ぐ時、感情

そしてそこがどうひらけるかといえ

「わろからんにつけても、いよ／＼願力をあおぎまいら
せば、自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべ
し。すべて往生にはかしこき思いを具せずして、ただほ
れぼれと如来の御恩の深重なることをつねに思い出し
いらすべし、しからば念仏も申され候云々」

とひらける。私は私の二重化であると同時に、私は仏の二
重化である。それで自然のことわりにて柔和忍辱のころ
も出でくるのである。我々はそう思つて居らぬ時でもそう
なる。

「心の翼に、身の翼がそう」のである。

それでは、その信界へどうしたら入られるか、私の体験
をもつて秘伝とする。それは何時もいう、歎異抄二章の
「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいら
すべしとよきひとの仰せ蒙りて信ずるほかに別の仔細な
きなり」

あれなんです。我身は地獄一定とほぼ見透しをつけて、

「親鸞におきてはただ念仏して」

の仰せに沈潜する

「聖人もそうか、じゃあわたくしも」
と踏み切るのである。

(註) 松本解雄様の筆録より頂きました。

善財童子の求道

福島政雄

船師を訪ねて

今度はこの長者に教えられて又南の方であります。南の方に一大城あり、樓閣と言ふ名前であります。そこに船師何か船の事を司る親方という所でありましょう。婆施羅という名前の船の親方があります。そこに行つて一つ菩薩の法を聞いてはどうかと勧めるのであります。それで善財童子は長者に言われて都の方に向うのであります。その途中又善知識という事について色々な感じを起すのであります。善知識は諸々の波羅蜜、布施持戒忍辱精進というような諸々の波羅蜜を成就させ修業し、そして勝れた道を増すところの原因になる。善知識はそういう力がある。それから普く法海に入り、即ちあまねく道の世界にはいつて無碍道、何らの碍の無い道を成就する因となつて下さる。尚又一切衆生を煩惱や邪な業の道から離れさせる因になつて下さるのも善知識である。それから一切の衆生を一切智と言ふ道に導いて下さるその因となつて下さると、色々な善知識の事を考へて、ああ善知識というものはなかなか

船師が善財童子に告げて言いますには、自分は海岸の樓閣になつて居る大きな城に住んでいる。そして清らかに菩薩の大慈悲の行を修業している。そして貧しくて苦しんでいる衆生に色々利益を与えてそう言う人を助けている。先ず世間の珍しい宝物とか、飲食物なんかをその衆生に与へそしてその心を満足させて、それからそのあとで法施、まことの道を説いて聞かせる。そうするとその衆生は心に歡喜が起つて来る。そして幸の修行をさせる、そして智慧の道を生ぜしめる。そして善根を作るところの力を増さしめる。それから菩提心を起こさせる。そして衆生の海をその胸の中におさめ入れさせる。そして功德の海を修行させる。そして諸々のまことの道の海を照らさせる。こう言う事を先ず言うのであります。色々な事を海に譬えて言つて居る、その海に譬えて言うところには広く深いという心持がこもつて居るのであります。それからなお言葉を続けまして、一切の宝のあるところの島を知つて居る。それから一切の宝の在り場所ばかりでなく一切の竜宮というものを知つて居る。この大海の波というものについて、海の波が遠くにある、近くにある、こう言う事がわかる。それから海の水の色がいいとか悪いとかいう事もわかる。海と言つても色々な水が交つて居る。それがわかる。それから日月星辰、そう言うものが空を廻る、その度数も自分はわ

遇う事も難ければその人を見ると言うのも難い、そう言う事を思いながら行きますのであります。だからこの善財童子が一人の善知識に別れて次の善知識に行く途中の事をこの処でも悉く善財童子の気持を書いてありますが、これがなかなかのいい処と感ずるのであります。一人の善知識に遇えば非常に深く感じて、ああ善知識でなければならぬ善知識でなければならぬとこう思い通して道を歩んで行くのであります。

航海とさとり

そこで今の都に行くのであります。そうするとその船師の親方さんはその城門の外の海道の所に居るのであります。そしてその親方を取巻いている人というものは百人の商人の大衆というのであります。商人が沢山その団に集つていて、今の親方さんは大海というものはどういふものであるか、こう言う事を説いて居る。すると善財童子は一心に合掌して又菩薩道を問うのであります。そうするとその

かるがそれからその海に浮べる船の鉄製であるか木製であるか、堅いか脆いか、そう言う事も心得ている。それからその船の機関の具合も心得ている。それから水の大小、風の逆順、順風か逆風か、それから船を左右に廻す事、どんな時に安全かどんな時に危いか、そう言う事は自分は皆わかかつて居る。そしていい船で沢山の商人を運んで、安らかな穏やかな海の上の道を行く。そしてその海の静かな所を示す。そして恐れるところがない。そして商人達の願いに従つて宝の島の所に連れて行く。そして大きな船で往來して昔から今迄まだその船が壊れたという事がない。其処迄は大體航海術という事をよく心得ていい所に連れて行く事が出来ると言ふようなむしろ世俗的な事を言つて居るのであります。大きな船の船長さんという格で言つて居るのであります。ところがそれから問題は深くなつて行くのであります。

仏の世界へ導く

衆生があつてこの私の体を見、私の法を聞く者は長く生死の海、私共の迷いの世界であります。この生死の海を恐れないうようにして上げる。それはどう言う事かと言ふと、一切智の海に入つて、愛欲の海を尽して愛欲を超越すると言いますか、愛欲の海の徹底する迄まことの道を徹せしめ

ると言うのでありましよう。それから智慧の光が三世を照して、でありますから、三世の海を智慧の光で以て照す。それから一切衆生の苦しみの海を尽す、でありますから、苦しみの海に徹し、つまり苦しみを超越させるといのでありましよう。そして一切衆生の心界を清め、でありますから、心の海を清らかにして上げる。それから一切刹海、でありますから一切の国々を厳浄、非常に厳かな淨らかなものにして上げる。それから十方仏の海に往詣せしめる、十方の仏の所に連れて行つて仏を拜ませる。それから一切衆生の根、眼耳鼻舌身、そう言う事を徹底的に知らせる。それから一切衆生の行とと言うものを海に譬えて、その海をすつかりわからせる。そして一切衆生を海に順つて行くようにさせる。これが自分のわかっている事だと言うのであります。

そうしますとこの船の親方さんはなかなか偉い。ただの船の親方さんでは無いのでありまして、船を操縦して航海を安全にする、結構な所宝島に連れて行く、そんな事を始に言っていますけれども、本当の所は仏の悟の世界にまでつれて行く。そう言う事を海を譬にして言っている、或はその航海術を行い船を操縦して行く間に於いて、様々の海と云うものを見て、深く眺めて、そしてその海と云うものからこう言う風の悟の世界を極める、こう言う事になるのである。と言う風に申すのであります。

それで、船師と言いましたか、この船の親方、船の船長さんと云うものは、實際船を練りながら、船であちらこちら渡しながら、実は私共を迷の世界から悟の世界へと導く人である。こう言う風に受け取れますのであります。實際航海術、船長としての立場というものはこう言う海について色々の深い体験を得る事が出来るであろうと言う事は思われますのであります。

善知識最勝

それから今度はその次の善知識であります。又南の方でありますか、一つの城邑、都であります。その名は楽嬰路と云う名である、その中に非常に働きのある人があつて最勝と云う名前の人、そこに行つて一つ菩薩道は如何と聞いてはどうかと言うのでありますから、善財童子は今の教にすつかり感じて、涙を流して行くのであります。やつぱり善知識を求める心にもうこれだけで沢山だと言う心を決して起さない、まだまだ善知識を求めなくちやならん、心に厭足無く、であります。そして善知識を慕い求めると言う心を一層深くしまして、真に今の船師を觀察して、辞退して其処を去ります。そしてやつぱりその途中も色々の深い心持を起しながらまいりますのであります。仏の大悲

はないかと思つてあります。つまり船主として始終航海して貨物を運ぶという事をやつて行くうちに、色々様々の海を見る、これはまあ私共でも、たとえば日本の港から出まして玄海灘を始めだんだん支那海、南洋の方に行つて印度洋を通つて紅海を通つて地中海にはいると、それだけの海の旅を致して見ましても、海の色なり海の趣なりというものが一に違つていふ事を感じますのであります。そう言う事を自分の仕事としていふ事になりますと、それぞれについて深い感じを起すに違ひないのであります。そうしてその航海という事を自分の渡世としておりながら、そこに仏の悟の世界まで通じますような、そういう所が心に開けて来る。こういう風に一つの道に深く徹するということ実は尊いことと思つてあります。

それで今の海師が最後に申しますには、もし衆生があつて、こう言う事を聞いて考えて、そして自分と一しよに生活したならば、皆こう言う悟の世界というものが空しくならず、必ず開けて来る。が、自分ではこれだけの事であつて、諸々の菩薩の如くによく生死の大海を遊んで渡るような事をして、諸々の煩惱の海に染まないうで、一切の間違つた見解の海を捨てて一切の法性の海を見る、そして一切智と云う海に落ち着くというような、そう言う事迄は自分出来ない。そう言うところは自分の及ばないところであ

が自分の心をうるおして下さると言うような心持、それから堅固に精進する道を求めて行く心、だんだん深い心持を起して今の所を訪ねてまいります。そして最勝長者と云う長者を尋ね求めてまいりますとその城の東の大莊嚴幢無憂林であります。憂いの無い、無憂林の中にその長者がいるのであります。そしてこの場合もその長者の囀を取り巻いているのが沢山の商人達であります。沢山の長者、そう言う人達であります。そうすると又善財童子は自分の身を地面に投げてその足を頂礼し、しばらく御礼をしておりましてやや久しくして立つて、その長者を尊ぶ心をして菩薩道を今度は細かにたずねております。

そうするとその長者は善財童子を賞めます。そしてこういふ事を申します。自分は已に一切の処に行つて菩薩の行を浄めるといふ道を成就しておる。そう言う事を申します。それでその城や村一切の場所、諸々の衆生の内、その衆生の心に応じてその衆生の為に説法をします。そして間違つた道を捨てさせて、喧嘩口論でもしておればそれを息めさせ、闘つてでもおれば闘うといふ事をやめさせ、又腹を立てておるといふ事があればそれをやめさせ、お互に怨みの心が結ばれておるとその怨の心を破つてやめさせ、そして色々の心の繫られておる状態を解かせ、それから牢獄にはいつている者があればその牢獄を出させる。そして恐

ろしい所を免れさせる。生き者を殺すという事をしないようにさせる。そして一切の悪業、悪い仕事であります、それを禁ずる。そして色々の間違つた見解を断ち切つてやめさせて、仏の道に入らせる。その為に仏の世界から地獄の世界に至る迄あらゆる世界をそういふ衆生に説き示す。こゝう言う事をして長く煩惱業というものを無くさせる。そうして仏の淨らかな道を説いて其処に止まらしめる。

こう申しますのであります。これは又なかなかの事であ

三五・十二・一日。

三宝に帰依しまつる

榊原徳草

三宝とは仏と法とであります。

仏教とは新しい言葉であつて昔は仏法と云つております。宗教と云う言葉が輸入されてから、キリスト教とか他の宗教に対して仏法のことを仏教と云つてそれらの教と區別したもののようであります。だから仏教の語は外の教に対しての云いかたで、三千年の昔に大覚成道された釈迦牟尼仏の教にそのまゝ名づけるとすれば仏法と云うことになりす。仏法とは久しくわれら祖先の代々の人々が身につけてきた言葉であり遙かな伝統をもつた仏教のほ

りまして、この俗世間に行われている悪い事を自分は菩薩の行をおこなうと言ふ立場から、こゝういふ事をやるといふのでありまして、これはまあなかなかの仕事でありますけれども、私共もそういふところを理想として持ちたいと言ふ事は考えますのであります。もう少しお話をするつもりでありましたけれども目が疲れて見えなくなりまして、こゝまでにして頂きます。

んとうの呼び名であると私は思つております。

それでは仏法とは何であるかと云うと古来から仏法とは三宝に帰依することだとされております。

現在仏教各宗派ともに少しずつ言葉は變つていますが三宝に帰依することを常に誓ひ唱えます。「三帰依文」は儀式の時などに最初に宣誓するように唱和されます。

自ら仏に帰依したてまつる
当に願わくは衆生とともに

大道を体解して無上意を發さん

自ら法に帰依したてまつる

當に願わくは衆生とともに

深く経藏に入りて智慧海の如くならん

自ら僧に帰依したてまつる

當に願わくは衆生とともに

大衆を統理して一切無碍ならん

聖徳太子は『篤く三宝を敬え、三宝とは仏と法と僧なり、則ち四生の終歸、万国の極宗なり。何の世、何の人か是の法を貴ばざる……其れ三宝に歸りまつらば、何を以てか枉れるを直うせん』と憲法第二条に仰せになつてゐる。覺如上人は報恩講式の始めに『敬うて大恩教主釈迦如来、極樂能化弥陀善逝……仏眼所照微塵刹土の現と不現前との一切の三宝に白して言さく。』と云つていられる。

仏教とは三宝に帰依することから始まつて三宝に帰依することゝに納まりがつく。これが仏教であります。

今年の夏、私の生れた寺の甥になる少年が、御本山東本願寺で御得度を受けた。父母や小さい妹とやつて来て一泊しその翌日かに御得度をして國に歸り、御得度報告法会をすませたといつてその時の写真を送つてきた。京都のこゝへ来た時は長い髪だつたが、写真には可愛い円頂の僧服をまつた姿が写つてゐる。法主親下の唱導で三帰依文を無我に真似して唱へたことだろう。帰依

仏と法主の唱えるのに唱和して帰依仏とやる。帰依僧みな然りである。親鸞聖人が御年九歳にして青蓮院の伯父さま慈鎮和尚の下で、御得度なされた。その遺風を護りこのいのちを継がんとして真宗では九歳頃に御本山で得度をするしきたりである。聖人もきつと四帰依文を慈鎮和尚の唱導に和して無心に「帰依仏」「帰依法」「帰依僧」と、春の夕辺にあの東山の關にひよかせられたことであろうと思ひます。

仏教は三宝に帰依することに尽きるのであります。

三宝の宝とはたからであつて、そこらに何所にでも転がつてゐるものではない。それが宝物でありませう。しかしまた宝物を宝物と見付けることの容易でないことから宝と云えませう。普通ありきたりの誰の目にも見出せるものは宝物ではありません。仲々見当らないもの、又見付かつたら世にも珍らしいもの、これが宝であります。

こゝうして見ると仏と法と僧との三宝に帰依しまつることは仲々大変なことであり、自分の能力や智慧で走り廻つて見たところでその力や働きだけで採し出されるものはありません。これが真実だこれが仏教の真髓だと思つていたところで、それがほんものか偽物か、全く三宝帰依になつてゐるのか、疑問でありませう。

私が此頃になつて感ずることは、一体三宝とか別体三宝とか三宝について学問的な考え方について興味を持つてはありませぬ。私が不図思ひついたことは仏と法と僧との三宝帰依の順序、

その並べ方に気がついたことです。

一気に結論的に云えば、先ず我々が仏法を学ぼうとする心構えはどこに向けなければならぬか、それはどうしてもこの順序に従わなければならぬ、最初に「仏に帰依」せねばいけないということであり、次に「法に帰依」することによって始めて法にも帰依することが出て来るのであり、次に僧に帰依することがおのずから現れてくる。この三帰依は順序通りに連続しているものであり、三宝は又連続するのみでなく全体として一つのものになつてくるのであります。

我々が人としてこの世に生をうけ、もの心がついて人生の苦難を身にかけてくる、矛盾に打ち当たる、自分が自分で解決がつかないような破目に立ち至る、これが人生の偽らざる真相であります。或は思いもよらぬ業報の顛れに息の根の止るような事実に遭うこともあり、又深く人格の矛盾に苦しむ、どうかしてこゝから脱却して自分の生きることに一道の光を欲しい、苦難を払つて足が地についた日々を得たい、そういう心境に立ち至るとき始めて宗教的な心情が湧いてくるのが求道心となつて現れてくるのであります。

この時に真実とは何を云うのであるか、末通つた真理とは何であるか、とその真実真理を求めるところであります。こゝで間違ひを起すのが大方であります。若い知的な人々や相当の年輩の人々でも直ぐ法に向うのが常であります。法とは一口に云えば真実とか真理とかいうことであり、我々が迷いを脱し矛盾を解き抜き

仏の残された教法すなわち仏法に真実を聞き仏に遭ひ仏に帰依することが大切になつてくるのであります。この場合に仏の教法は実は仏そのものであり教法の言葉、文字、經典は仏のいのちであり仏の御まことであり、悲しい哉それがそうと受取れず自分勝手な理解にしかならない。

こゝに仏陀より綿々として法燈を護り、世々にこの仏のいのちを伝承して今日に至つて下さつた祖師がおります。この伝法の人伝承の人、祖師が真宗では七高僧となつて現れ、禪宗では印度に二十八祖、支那に伝承した東土の初祖達磨大師を第一祖として綿々として今日に伝承されています。かくの如く釈尊以後の伝承の祖師方は我等凡夫から対向したとき祖師であります、仏から我等に對する時は皆仏の化身であり祖師方は皆仏陀であります。釈尊は又過去にその師なる仏があり通仏教的には過去七仏といつて七人の仏から伝承して来ておられます。大無量壽經には阿彌陀仏の師である世自在王仏とそれより昔に五十三仏が法を伝承しておられます。

吾等是一口にこれらの仏と祖師を「仏祖」と云つておりますが、仏の方から仏の慧命を継いで世々に出現して下さる趣きを拝すれば皆仏様であり、凡夫の方から仰げば過去五十三仏に到るまで祖師であるとも云えましょう。道元禪師はそのように云つております。

仏に遭うこと、仏に帰依しまつることは、私をして言わしむれ

与樂の境に入ろうとするには法に直接向うことでは解決がつかない。それにはその法に生きた人、法そのものの顕現である所の仏陀に向わねばいけないのであります。仏に帰依せねば駄目であり、群盲撫象という話がありますが、沢山の盲人が一匹の象を撫でてみて、これが象だと解つたことのように思う、ある盲人は象の足を撫で象とは柱のようなものと思う、ある盲人は象の腹を撫で象とは壁のようだと思う、耳を撫でた盲人は象とは大きな扇だと思ふ。丁度吾々迷える者、人生の真相に徹し得ない者が真理とは何か不変不動の真実とは何かと求める姿はこのようであり、法に直接解決を求めるものは必ずこの盲人と同じ誤りをくりかえす外はありません。私達迷妄の愚か者は法に立ち向うのではなく、法を体現し法に任して居られる自覚せる人即ち仏陀覺者に立ち向わねば我々の願ひは達することができません。

仏遺教經に釈尊は「私が滅度をとつた後は、法に従うように」と説かれておられますが、法に従うとは釈尊という仏の教を待つて始めてその意義をもつのであつて、仏陀を退けた法というのは根から切られた木のようなものであります。仏陀の仰せに聞いた法こそいのちのある法であります。そして仏陀の教に法を見る人々が僧であり和合衆であります。

「仏に帰依しまつる」ことを最第一の大切なことであつても既に私達は釈迦牟尼仏の滅後三千年の後世に生をうけておるとすれば釈尊に教を聞きまつることは不可能であります。それで釈尊の残された教法によつて仏に遭う外に道はありません。こゝに

ば師に会うこと師に真実を聞くことであります。

師に真実なる法を聞くこれが帰依となつて来ます。

歡喜抄第三章に、親鸞聖人は「親鸞におきては、たゞ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、好き人の仰せ蒙りて信する外に別の仔細なきなり」。有名なそして又ピツタリとそのまゝ、真似のできる帰依の方法、好き人の仰せのまゝを念仏一つに安心することの好き人、こゝでは法然上人であり聞き手は聖人であり、私達にしてみれば親鸞聖人が好き人、祖師ではありませんか。

好き人の仰せに聞くのは「オネガイダカラ スグキテオクレヨ」との仏のお真実であります。

法とか真如とか真実とかいわれることは、一如法界のことからあつて老少善悪是非曲直をもつて身として生きているなまの吾々には関係のつけようがない、恰も生命なき砂の悲しさであり握つたと思ふ刹那に指の間からサラ／＼と落ちてしまふにきまつています。

この生の身に対して法性の都から大悲を起してこの私により、そうて方便法身の仏となり現れ給う、秋の天地が紅葉となつて現れ秋を知らすように、阿彌陀仏となつて私に現れて下さる。煩惱具足、極悪深重が吾身となつて現れている姿に即応して、法身が大悲の衣を纏うて阿彌陀仏と顯れて下さるのです。私の地獄一定の身に対して法性の都から法藏菩薩となつて現れて下さるのであります。

どの仏に帰依してもよいのではない。無量無数の仏がその救う相手を定めて現れて下さるが、吾等のようなしてみようのない相手を目標に大悲身を現したのは阿弥仏一仏あるのみでありませぬ。私が因となつて阿弥陀仏は大悲身を現したことに氣をつけ心を集中し好き人の仰せに聞かねばなりません、こゝが大切であります。こゝが私の肺腑をつく所、こゝが要であります。師に聞く仏の真実、師はこれまた仏の化現の身、大悲の權化身であり如来聖人であります。祖と云い師と云い仏と云い、大悲のゆえに身をとつて現れ給うて私により添りて下さる。

「阿弥五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」との聖人の讃仰感謝の述懐は「愚身の信心におきてはかくの如し」と阿弥仏釈尊、歴代の祖師、よき人法然上人をあげてその仰せに帰依しておられるのであります。

祖師の仰せに聞く阿弥陀仏の真実は、大悲の故に身をとつて現れ給うたのであります。

一如でなく如来様であり、法性でなく法性法身であり、方便法身であり、名と声とを取つて吾々の名と声に即応して現れ給う、こゝに仏に帰し師に帰せずにおれない大悲の感応が現れるのであります。具体的な徳章に対して個有名詞の南無阿弥陀仏の一仏が

心と真実

第十 仏の慈悲

区長は先租から伝わる経文を出しては読んだ。

一、仰せに、一念発起の時、往生は決定なり。罪消してたすけたまわんとも、罪消さずしてたすけたまわんとも、阿弥如来の御はからいなり。罪の沙汰無益なり。たのむ衆生を、本とたすけたまうことなりと仰せられ候なり。

御一代聞書、三八。

区長は、ああ、これは蓮如上人の仰せである。四百年も前にすでに自分のことを心配しておしえて下さつてあるのだ、と思つた。一阿弥の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんと思いたつころのおこるとき、すなわち撰取不担の利益にあずけしめたもうなり。阿弥の本願には老少善悪のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとするべし。そのゆえは

罪悪重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信せんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに、悪をもおそるべからず、阿弥の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと、云々

歎異抄、第一条。

あるのであります。權化の仏なる祖師によつて大悲身を成就した仏に引き合わされる者、あゝ何たる幸せでありましょうか。

(三六、九、一七)

雲の峰

疲れたる旅人の
あおぎみる大空に
さまざまの姿して
わきあがる雲の峰
わきあがりやがてまた
くずれゆく雲の峰
あわれそのさだめなき
まどわしの姿かな
わが迎る運命の
はてしなき旅の空
われはまた日毎見る
たのみなき雲の峰

佐藤強三郎

これは七百年前に、親鸞聖人の仰せられた事を唯円房がそのまま誌してくれたものだといふ。

罪悪深重、と申されてある。これは誰のことだ、ああ……
或る時、信哉は区長の倅へ手紙を寄越した。

「御元氣ですか。私はこの年になつて、あの姥捨山の御話を思い出してはありがたく感じて居ります。

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ

親の身すててかえる子のため」と書いてあつた。

その手紙を見て倅は改めてそれを思い出し、又新たに感じた。あの姥捨山の話とは、こうであつた。

「ある不孝な息子が年老いたる親を捨てて奥山に孫と籠をかついで登つた。親は籠の中で別に不平も言わず、手を出しては木の枝を折つて道しるべとした。それを見て息子は、これは親が捨てられてのち、一人で山から帰る時の目標を用意しているのである。往生際の悪いものだ、と心に軽蔑していた。そして息子と孫が、親を捨てて山を降りかけた時に親は、息子の袖をとらえて、最後の遺言をして言うには、

「これが一生の別れである。随分身体を大切にせよだいぶん山

も深いから、日の暮れぬ、途の明るいうちに早く帰りなさい。そのために道しるべをしておいた、迷わぬように我家に帰り、どうかが跡を継いでくれ」と言つた。途々の枝折りは親のためでなく、全く息子のためにやつたのであつた。一途に子供の行末を案じてやつてくれたのであつた。この思いがけない親の心情にふれて息子は思わず地にひれ伏して、親の真実の偉大なるに驚き感泣して、涙のとめどがなかつた。あゝ捨てられた、死にかたが大事であると聞いていたが、これはまあ、と驚いた。

さて親を追いかけて改めて頼むには、どうかこの籠に乗つて下さい、と我家にお供して一代の間よくお仕えした。

かく親の絶対なる真実がいかなる不孝の子にも徹到して、感激懺悔せしめた。

如來の本願、即ち親心なるものは、絶対無限の真実である」

と言う話であつたと吟味した。

その夜、区長は倅とこの姥捨山の話をして夜をふかした。区長は床について

「私の親が仏を信じ、お経を読めと遺言してくれたのはこれは枝折りであつたのだ、かたじけないことである」

と深く感じた。

倅は寝て

「父が失敗をやり、驟然と目醒めた事は、これ人生の経験と、その責任感とを、身をもつて自分に教訓してくれたのだ。実に尊い見本である。自分もこれからさき気をつけよう」

と感じた。その々、灯明は長く／＼輝いていた。

のいふも
これが私の我慢なのです

ところが、やつてはしくじり、又やり直しては後戻りをして、この苦海にとどまることが久しいのです。流転ですね。この我慢のやまぬ、悪いものを憐んで、慈悲の心をもつて、いつも／＼愚痴をこぼして忘れずに見守つて下さる心から、案出して下さつたが、念仏成仏の一乗海です。他にないから一乗なのです、一仏乗です。

私共は、一旦分つたと思つてはまた間違ひ、また間違ひ、それだから、どこまでも御呆れないお慈悲なのです。それを自分の心で、こんな間違ひ奴は、やつぱり駄目だ、と自分で卑下して人にも仏にもへだてるのです。

然しありがたいことには、——大悲ものうきことなくてつねにわが身を照すなり……です。

○あと戻り あと戻りしてたどらん

甲斐なきことどころまで

もともと信仰心は自分で造つたものでなく、悲願より自然に生じたのです。この悲願にあわずばどうして信心が起きましよう。

ところが人間は、煩惱、名利のかたまりだから、仏より頂いた信心を、いつのまにか自分の宝物として、自ら誇り、人に威張り出すのです。また広告したがりです。実際他人は褒めもし、感嘆もしましょう。これが自惚のたねになります。こんな風になると、仏の撰取の光明も見えなくなつてしまふ。忘れるので

信哉は一年位たつてまた来た。
ある休みの日区長は信哉の室へふらりと這つて来た区長の倅もあから、

区長「前に捨吉さんへ下さつた仮名書、

じぶんのような、いつまでもいつまでも我慢のやまぬわるいものを、かわいそうにおもひ、それをどこまでもあきれないおじひをきいて、ありがたいとおもうほかになにもありません。しんやはいしや（拜写）

というのは、私も暗記しました。近頃大分いろ／＼のことを聞いたのですが、仮名書のような簡単なことでよいのでしようか」

信哉「わたくしは一生いただいてもつきないといつもいつもありがたく拜誦して居ます。

親鸞聖人の御和讃に

○聖道権化の方便に

諸有に流転の身とぞなる 衆生ひさしくとどまりて

○煩惱にまなこさえられて 撰取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

○信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然はすなわち報土なり 証大涅槃うたがわず

とあります。あの仮名書は、これらをわかり易く説いて下さつた

私がある力で諸々の善をなし、それによつてこの人生に絶対安楽な境界を見出そう、自分で仏に成ろう、と我を通して

す。凡夫の馬脚をあらわして来ます。凡夫は仏ではないのです。仏になつたのでもないのです。

我身の力量を忘れ、自惚れ出すのが自分です。

この様に悪いと言つては悲観し、善いと云つては自惚のやまぬ本性を、かねてしるしめして、大悲ものうき事なくて、常に我身を照らして下さるのです。

そのどこまでも、あきれない御慈悲をきいては、あと戻りして一生を終る外ないと思ひます。そして自然はすなわち報土です。

……何時までも我慢のやまぬ、気の毒なわるいものをどこまでもあきれない……というのです。

どこまでも、と言うのは無碍です、無限です。しきりがありません、どうですか。これでもまだ足りないでしょうか。

どこまでもとは……本当にどこまでもなのです

罪深からんにつけてこそ、どこまでもあきれ給わぬのです。

間違ひをくり返す者なればこそどこまでも呆れ給わぬのです。治らぬ片輪なればこそ、どこ迄も呆れ給わぬのです。

あの仮名書はホントにありがたい。一生いただいてもつきないと思ひます」

区長は信哉の話を身をいれてきいていた。しばらくして、静かに頭を下げて退出した。

続く

あとがき

被災地の皆様に、台風十八号の御見舞を申し上げます。

御案内

十月二十九日午後一時から、京都市右京区山田開町浄住寺で、池山先生の忌日法会の一追会が催されます。有縁の方々の御来会をお待ち申します。

京都駅より沓寺行きバス、終点下車、南西四丁

新京阪、桂乗換え、上桂下車、西へ七丁

○ 初秋の空はいよ／＼晴れて心澄むことでありますが、原爆実験の再開、国連事務総長の急死、等々の暗雲が世を覆うて居ります。この障り多い人生にあたって、いよ／＼無碍光の照護を畢竟依として、夫々の職場において全力を尽くさせて頂きますよう。

○ 近頃特に、新興宗教の一派の人々の独善と強制による迷惑を訴えられる声がしきりでありますそれにつけても徒然草の著者の「心に主を持って。山中の空家には狐狸が入り自由である。老翁にしても主人が居れば、狐狸はもとより、人さえ挨拶なしには出入り出来ない」との警告を思い併せられます。

○ 「他山の石」の池山先生の原稿は昭和四年、先生が京都に居を移された頃、ニイチエとゲエテを他山の石として、念仏の真意を述べて下さったもので、愛媛大学の松本解雄さんが、筆録して下され奥底に藏して居て下さったもので、一追会を待つて発表させて頂きました。

○ さて聖人の七百回忌の秋も過ぎて逝きます。本年までは親鸞ブームというようなものがあつて、宗教家、文筆家、科学者、芸能人、等々、有名無名の讃仰者によつて、種々雑多な聖人像というものが地上に氾濫しましたが、それらも段々下火になつて行きます。

○ 然し、春の雑沓をすぎ夏の縁風も終る時紅葉の秋と共に河水が澄み、川底の石が透見されるように、聖人の真面目は、これくらいいよ／＼顕現して下さることでありましょう。それは「独留百歲」の真実教をいのちとせられる聖人の自然の徳風であります。

御案内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、日曜講話。一追会館。市電、新郊通り一丁目下車。

毎月廿四日、午前、午後、昭和区小椋町教西寺。法話会。

八月まで休ませて頂きましたが、九月から日帰程度の行程で法縁を結ばせて頂いて居りますので、不在の日があります故、御来庵の方々に、あらかじめ御連絡下さいませようお願いします。

定 価 一 部 二 十 五 円 (送 共)

半 年 百 五 十 円 (送 共)

一 年 三 百 円 (送 共)

名古屋市南区上町二ノ八八

編集・発行人 花 田 正 夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷 人 本 田 政 雄

名古屋市南区上町二ノ八八

発 行 所 慈 光 社

振替口座名古屋一〇四七〇番